

【NTR支配】夫の上司に墮とされる強制絶頂4（最終話）　　＼献身妻の完墮ち＼

サンプル（一部抜粋）

黒崎さんがいなくなってから8ヶ月… どんどん会話がなくなり冷えていく裕也との関係をなんとかしようと私は立ち上がった。

「裕也…」

「んー？」

「今度…デートでもしない？」

「急にどうしたの？」

「……このままじゃ…ダメだと思うから…」

「……」

「離婚はする気はないんだよね…？」

「…会社の評価が落ちるのは困るから、しないかな。」

「…なら…元に戻るように…頑張らないと思って。」

「…自分の奥さんが他の男に抱かれているのを見せられたのに？」

「…っ、でもそれはあなたが黒崎さんを…」

「その名前、聞きたくないんだって。今はまだそんな気持ちになれないよ。」
どこか蔑むような目で私を見る裕也……。

その時、裕也のスマホからピロンピロンと通知音が響く。

「……」

裕也は画面を見てニヤツといやらしい笑顔を浮かべていた。

その顔を見た瞬間、ああ、もうダメなんだ……と気付いた。裕也が過去に何をしたのか、分かった上で歩み寄ろうとしたけれど……もう心はとつくに離れてしまっていたみたい。

だからといって黒崎さんに連絡も出来ないけど……私はこれからもこうして孤独なんだろうな。黒崎さんに……堕ちたりしなければ……

そう思うけれど……後悔はしていなかった。

(中略)

思い出は……美化されてしまうからなのかな。

あんなに酷い事もされたのに……。

「はあ……」

何度目か分からない溜息について、ぼーっしているとピンポンとインターホンの音が鳴り響いた。

「……はい」

何か頼んだっけ…そう思いながら玄関のドアをガチャッと開ける。

「…!!」

だけど開けた瞬間、私は目を見開いてフリーズしてしまった。だってそこにいたのは、夢でいいから会いたいと願った黒崎さんだったから。

「…お久しぶりです。奈々さん。」

以前と変わらない少し冷たい視線、私をまっすぐに捉える瞳…

「黒崎…さん…?なんで…」

哑然としながらそう言っていると、黒崎さんが少し困った表情でフツと笑った。

「…復讐しにきました。」

「復讐…?」

「ええ。中に入っても?」

「あ、…どうぞ…」

まだ頭がふわふわしてる。というか…黒崎さんに会えるなら化粧くらいしたかった…。服装だつてこんな適当な部屋着じゃなくて…つて私、舞い上がりすぎだよね…。

ボタンと音が鳴って、私と黒崎さんの二人の空間が完成した。その瞬間、黒崎さんは強引に私を抱き寄せた。

「…会いたかった。」

（中略）

「…あなたは僕の復讐の為の道具だ。」

私の目を見ずにそう呟く黒崎さん。

ああ、嘘なんだ。ちゃんと…会いたくて来てくれたんだ…。それだけで…私は幸せになれる簡単な女だ。

「…奈々さん。あなたに拒否権はありませんが…いいですよね？」

昔とは違う契約…。私はニコツと微笑んで、ゆっくりと頷いた。

「私を黒崎さんの好きに…してください。」

過去に黒崎さんに身体を許した時と同じ言葉を、違う意味で口にする。

「…じゃあ遠慮なく。」

黒崎さんは覗き込むように私に顔を近づけ、キスをした。何も変わっていない…。あの頃の黒崎さんのままで…胸が苦しい。

「ん…ん…」

くちゅくちゅと唇を重ね、舌をねじ込まれる。

「んあ…ん…ふ…っ」

気持ちいい…4年経っても身体は黒崎さんを覚えている。最後に黒崎さんに愛されてから…誰

にも上書きされていない。乾ききった身体が、ようやくオアシスにたどり着いたかのように歓喜する。

「…相変わらず良い反応しますね。」

黒崎さんはそつと私の頬を撫で、褒めるようにそう呟く。

「…黒崎さんに…犯されるのを待っていましたから…」

もう…彼とセックスするための鎧は必要ない。夫の為ではなく…私のために彼を求めているから。

「…僕も同じです。」

くすつと黒崎さんが目尻に皺をよせ、笑う…。

「…また…復讐が終わるまでの関係ですか？」

そつと彼の手に指を絡め、胸に頭をよせて不安を口にする。

「……そうですね。」

まあ今回の復讐は一生終わりそうにないですが。」

(中略)

「少し…痩せました？」

心配そうに肋骨を撫でる指。

「っ…分からない…です…」

「……」

下着も何もかも床に捨てられ…黒崎さんの瞳が私を捉える。

「…さて、復讐ですからね。縛らせてもらいますよ。」

スルツとネクタイを緩める長い指。縛る必要なんてないのかもしれないけど…これが私達だから…。

「……」

何も言わずに両手を束ね、黒崎さんのネクタイが巻かれていくのを、ぞわつとしながら見つめる。

「もうスイッチが入ったような顔をして…困った人ですね。」

ネクタイが手首に食い込むくらい強く縛られ…ぎゅっと覆いかぶさるように抱きしめてくれる…。

そのまま頭を撫で…呼吸が出来なくなるほどのキスで私の唇を塞いでくれた。

★続きは製品版でお楽しみください。

4年ぶりの再会、ネクタイで両手を縛られて貪られる激しい復讐セックスから、後半の溺愛朝エロまでを収録